

# SHOW HEY シネマルーム

## 私が、生きる肌

2011年・スペイン映画  
配給 / ブロードメディア・スタジオ・120分

2012 (平成24) 年 4月 13日鑑賞

角川映画試写室

### Data

監督・脚本：ペドロ・アルモドバル  
原作：ティエリー・ジョンケ『蜘蛛の微笑』

出演：アントニオ・バンデラス / エレナ・アナヤ / マリサ・パレデス / ジャン・コルネット / ロベルト・アラモ / ブランカ・スアレス / スシ・サンチエス

## 👁️👁️ みどころ

完璧な肌。それはすべての女性の夢だが、同時に男の夢？「監禁モノ」は『コレクター』（65年）や『完全なる飼育』シリーズでお馴染みだが、形成外科の権威は監禁したにつつき男にいかなる手術を？

愛のためなら何でもあり？ペドロ・アルモドバル監督が「これぞ禁断の世界」に切り込んだオリジナルストーリーは興味深い。少し背筋を凍らせながら、こんな崇高な(?)愛の姿をじっくりと……。

## 『コレクター』などと異なる、この監禁は？

世の中に、若く美しい女性を監禁して楽しむ変質者(?)がいることは、『コレクター』（65年）や『完全なる飼育』シリーズ（『完全なる飼育』（99年）『完全なる飼育 愛の40日』（01年）『完全なる飼育 香港情夜』（02年）『完全なる飼育 秘密の地下室』（03年）（『シネマルーム3』362頁参照）『完全なる飼育 女理髪師の恋』（03年）（『シネマルーム9』348頁参照）『完全なる飼育 赤い殺意』（04年）『完全なる飼育 メイド、for you』（09年））等で明らかだが、本作の主人公ロベル・レガル（アントニオ・バンデラス）はそんな変質者ではなく、世界的な形成外科の権威。「医者は金持ち」と相場が決まっているが、ロベルが住む屋敷の大きさは半端ではない。郊外にある敷地が何万坪もありそうなロベルの家は、鉄の門と石塙で囲まれた大邸宅。愛車を自ら運転して帰ってきたロベルがその中に入り、テキパキと帰宅後の一連の処理を済ませた後にチェックした大スクリーン上には、素っ裸の美しい女性が……。と思ったのは錯覚で、2階の広大な部屋の中で、素肌の上に全身特殊なボディ・ストッキ

ングをまとっている女性ベラ・クルス（エレナ・アナヤ）は、今ヨガの真っ最中。1階のキッチンで監視モニターでベラの様子を監視しながら食事などの世話をしているのは、ブラジル移民の初老のメイド、マリリア（マリサ・パレデス）だが、こりゃ明らかな逮捕監禁状態。一体なぜロベルは、ベラをこんなところにこんな状態で監禁しているの？それが本作最大のテーマだから、それに注目！

## 完璧なお肌はすべての女性の夢だが・・・

赤ちゃんのお肌はプルプルで美しいが、年を経るにつれてお肌は荒れシミやそばかすが増え、老齢になるとシワだらけに……。そんな中で「完璧なお肌」はすべての女性の夢だが、それは同時にそんな女性を愛する男性の夢？

現在監禁部屋の中でヨガに勤んでいる女性ベラは、形成外科の権威ロベルの「作品」であることがストーリー展開の中で少しずつ明らかにされてくるが、このベラはロベルの妻ガルと同じ顔かたちらしい。しかし、ロベルの最愛の妻ガルは、12年前にロベルの異父兄弟であるセカ（ロベルト・アラモ）と駆け落ちする中で起きた交通事故によって全身に大火傷を負った挙げ句、幼い1人娘ノルマの目の前で投身自殺を遂げたはず。すると、今ヨガに勤んでいるこの女性ベラは一体何者？形成外科の世界的権威ともなれば、完璧な人工皮膚の開発など屁のカッパ？もしそうだとすると、このベラの前身は？そんなことを考えながら本作を観ていると、その恐ろしさに思わずゾッ・・・？

## 全く別のストーリー展開は？

本作の主人公はロベルだが、中盤からは彼のストーリーとは全く別のストーリーが展開する。その主人公は、服飾店を営む母親（スシ・サンチェス）の元で働く若者ピセンテ（ジャン・コルネット）だ。ピセンテは今ドキの若者らしく仕事も遊びも大好きで、友人の結婚パーティーに出かける時はちゃっかりドラッグを服用して楽しんでいるらしい。そんなピセンテの目についたのが、パーティーに出席していたロベルの1人娘ノルマ（ブランカ・スアレス）だ。母親の投身自殺を目撃して以来、精神を病んでいたノルマは今は美しく成長し少し病状も回復したためこのパーティーに出席していたのだが、そこでハプニング的に起きたのがピセンテによるノルマの強姦事件。この事件を弁護士目線で客観的に見れば、長年精神病院に入っていたノルマの無防備さにも責任の一端がありそうだが、結果的にこの事件によってノルマは母親と同じ場所で投身自殺してしまったから、ロベルの悲しみは相当なもの。したがって、その悲しみの大きさ分だけ犯人のピセンテを発見した時は、ピセンテに対する憎しみに・・・。

本作はベドロ・アルモドバル監督が自ら脚本を書いたオリジナルストーリーだが、ロベルによるピセンテの監禁と性転換手術、さらに死亡したガルそっくりの完璧な肌を持つ女性ベラの創造というストーリー展開は非常に興味深い。しかして、この一連の行為（犯行）はガルへの愛？それとも、神への冒瀆？

## 性転換すれば？整形すれば？セックスもOK？

今や韓国女性の2人に1人は何らかの美容整形手術を受けているそうだが、誰だって不細工より美人の方がいいに決まっているから、整形はOK？さらに、もとは男だって今はしっかり女性器の機能があれば、性転換した女だってセックスはOK？さらに、その女性が自分の最愛の女性そっくりであれば、さらにOK？本作を観ているとそんな哲学(?)がまかり通りそうだが、ロベルにそれができた(できそうに思えた)のは、ロベルが形成外科医としての卓越した能力とスタッフ、そして莫大な資金と広大なお屋敷を持っていたためだ。

ベラ(その前身は実は男のピセンテ)がロベルによる理不尽な監禁と人体実験に猛反発していたのは当然だが、ヨガの楽しみを覚えてからは自らの運命を覚り、従順に女の道を・・・？さらに、ロベルの愛に応えるべくセックスのお相手もOK・・・？今やロベルへの反抗は無意味と覚り、女性らしいファッションも受け入れるようになったベラなら、今後は何のトラブルもなくロベルと幸せな生活を・・・？ベラの「約束」を信用したロベルはそんな考えの下で次第にベラに対する監視を緩めていったが、それを心配したのがメイドのマリア。思いもかけないセカの闖入とセカによるベラの発見、さらにせっかく完成していたベラに対するセカの肉体関係の強要という事件の中で、ロベルは容赦なくセカを撃ち殺したが、それによって本当に事態は解決したの？

そんな緊張感の中で起きるラストに向けての波乱のストーリーは、是非あなた自身の目で。このラストは誰も予想できないだろうが、観ているとなるほどこのラストが最も理想的・・・？

2012(平成24)年4月17日記

## ガールズバーの限界は？風俗営業法スレスレの攻防は？

1)「身体髪膚これを父母に受く」という価値観からは整形や入墨はもっての外だが、韓国は整形大国。それを徹底すれば、『私が、生きる肌』の主人公の試みもOK？何ごととも限界はどこかが難しいが、大はやりだったガールズバーも昨今接客中に飲食した女子高生が死亡する事件が多発したため大問題に。

2)カウンター越しの接客なら風営法が規制する「接待」に当たらないとして若い女性を安い時給で雇い客を満足させていたが、今後警察は摘発を強化するらしい。ポイントは「接待」を「歡樂的霽

困気を醸し出すことでもてなす」と規定している風営法の解釈だが、従来の警察庁の解釈運用基準では「特定少数の客の近くにはべり、継続して談笑の相手となったり、酒などを提供したりする」等だった。今後はこれを厳格化し、ボックス席などで隣に座らずカウンター越しでも、客に同じ女性を20分以上つけて談笑させると接待になるらしい。弁護士としては規制の必要もわかるが、映画評論家としては何でも規制すればいいものでもないと思うのだが・・・。

2012(平成24)年5月26日記